

## 教会の一致を求めて

——カエサリアのバシレイオスからアタナシオスに宛てられた書簡の考察——

飯 田 仰

「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」。

コリントの信徒への手紙一 12章 26-27節

### 1. はじめに

4世紀半ば、325年のニカイア公会議以後の古代ローマ帝国においてある喫緊の課題があった。それが教会の一致の保持である。アレイオス論争の余波は依然として至る所で感じられ、教会は分断の危機に常に直面していた。そのような状況下において、教会の指導者たちはお互いに情報共有を行いながら正統的信仰を確立させ、ニカイア信仰に基づく教会の一致を保ち継承しようと奔走した。その状況を見て取れる貴重な史料として様々なものが残されているが、その内の一つが書簡である。

古代社会において書簡は重要な役割を占めた。それには情報伝達の意図もあったが、教会の指導者たちは書簡を通して、当時直面していた様々な問題への対処を議論した。中にはとても個人的なものまで我々後代の者に残されている。今我々が書簡を読むことで当時の状況や筆者並びに書簡の受取人たちの様々な状況を垣間見ることができ、理解を深めることが許されている。そこには感情のこもった切実なる嘆願の「声」が残されている。

カパドキア三教父の一人として知られているカエサリアのバシレイオスも書簡を活用した一人であり、例外ではなかった<sup>1)</sup>。彼の書簡は、その著者の信憑性に疑義がかけられているものも含まれるが、現在 368 通残っている。彼はこれらの書簡を通してありとあらゆる事について意見交換をし、正統神学を継承しようとした。368 通の内の 6 通は、あのニカイア神学の巨匠と謳われたアレクサンドリアのアタナシオスに宛てて書かれたものであった (Ἀθανασίῳ, ἐπισκόπῳ Ἀλεξανδρείας)。一人の人物に対して 6 通もの書簡が残存しているということは稀有なことであるのかもしれないが<sup>2)</sup>、それには明らかに理由があったのである。

この 6 通の書簡を精査するとあることが見えてくる。それはバシレイオスが如何に教会の一致を保持することに全身全霊を注いでいたかということだ<sup>3)</sup>。政治的に長けており、教会間の調整役を担ったバシレイオスが如何に教会形成を成し遂げようとしていたのか、その一側面をこれらの書簡を通して理解することができる。

本論文では、これらのバシレイオスからアタナシオスに宛てて送られた書簡 6 通を概略的に紹介し、バシレイオスが目指していたことが教会の一致の保持であったことを明らかにしたいと考える。特にアンテオケ教会における問題が発端となり、アタナシオスという神学的権威と教會的基軸からの支援を得ることによって、カパドキア地方の教会の一致を目指そうとしたバシレイオスの姿

1) 古代社会における書簡の役割については、拙論「カエサリアのバシレイオスの神学的思想について——書簡からの考察 (その 1)」『伝道と神学』第 13 号, 2023 年, 187-205 頁。

2) バシレイオスからメレティオス宛に投函された書簡も 6 通残されており (書簡 57, 68, 89, 120, 129, 216)、今後これらの書簡の分析も必要である。これらの書簡は 371 年から 375 年頃に書かれたものとされている。内容が興味深いのが書簡 129 である。ここでバシレイオスは教義的な事柄に触れ、特に彼の三位一体の神理解について言及しており、アポリナリオス主義やサベリオス主義への反駁を行っている。バシレイオスの三位一体論を深掘りするための鍵となる書簡であると言えるであろう。

3) もっともこれらのアタナシオスに宛てて送られた書簡のみがこの傾向にあったのではない。むしろ、バシレイオスの書簡集全体を通して、また他の著作を通して、教会の一致を目指していたと言ってよいと思われる。

と神学的思考の特徴を考察することで、彼の中に常に通奏低音として存在していた概念が教会の一致であったことを考察していきたいと思う。

## 2. アタナシオスへの書簡

アタナシオスに宛てられて、現在も残存するバシレイオスの書簡は、書簡 61, 66, 67, 69, 80, そして 82 の 6 通である<sup>4)</sup>。以下、これら一つ一つの概要を紹介する形でバシレイオスの思考について考察したいと思う。

### 2.1 書簡 61

バシレイオスは先ずアタナシオスの手紙を読み終えたことについて言及する。残念ながらアタナシオス自身の書簡は残されておらず、その内容については推測の域を出ることはない。おそらく当時、教会内の教理的諸問題及びそれらによる分断の危機に直面していた状況を踏まえて、アタナシオスが諸教会宛に書簡を執筆し、それが輪読されていたのだと考えられる。

バシレイオスは、彼らが直面していた問題の詳細と具体的な内容については一切触れない。しかし、リビアの長官のことを「あの悪名高き男」(τοῦ ἡγεμόνος τῆς Λιβύης, τοῦ δυσωνύμου ἀνδρός, κατεστέναξας) と呼び、アタナシオスが嘆いている様子が綴られている点は軽視されてはならない。どのような「悪」を行っていたのかについての言及はないが、隣国リビアに対する嘆き悲しみ、そしてこの指導者の残忍さと不道徳さに対する危惧が示されている。

現状を描写するにあたってバシレイオスはコヘレトの言葉 10 章 16 節を引用する。「いかに不幸なことか／王が召し使いのようで／役人らが朝から食い散らしている国よ」。現状はまさにこのようであり、秩序が完全に乱れていると

---

4) これら 6 通全てに「Ἀθανασίῳ, ἐπισκόπῳ Ἀλεξανδρείας (アタナシオスへ、アレクサンドリアの司教)」というタイトルが付されている。バシレイオスの書簡は以下からの引用である。Basil of Caesarea. *Saint Basil: The Letters: Greek*, vol. 2. E. Capps, T. E. Page, W. H. D. Rouse & G. P. Goold, eds. (William Heinemann; G. P. Putnam's Sons; Harvard University Press, 1926-1934).

バシレイオスは指摘する。そして、このような人たちよりも家畜である牛の方がまだましであるとも言う。これらの者にはまことの裁き主からの懲罰が待ち構えており、主の聖人たちに加えられた損害と同等のものがこれらの者の上にくだるであろうという。

どうやらこの長官の存在と悪徳については、アタナシオスの書簡を通してバシレイオスの教会でも知られるようになったようである。バシレイオスは、皆が如何にこの者を忌避しているか、今後、火も水も宿も一切共有することはないであろうと述べる。もし伝えられていることが真実であるならば、この者に加担する者たちも同じような非難を受けるであろうというのである。

一方で、こうした者たちの悪行については、アタナシオスからの書簡で扱われ、その書簡が広く多くの人々の眼前で読み上げられ周知されたことでもう十分であるとも述べる。この書簡の内容は津々浦々に行き渡っているとし、懲罰が直ぐにくだされなかったとしても——バシレイオスはここでファラオの身に降りかかった懲罰の速度と比較するのだが——いつの日か、その重みと重大さは増し加えられるであろうとして本書簡を閉じる。

ここでは明らかにバシレイオス自身の感情が込められており、その感情が節々に滲み出ている点が興味深い。キリストの体である教会を分裂させるような勢力は決して裁きを免れることはないことを強調しているような内容である。アタナシオスの書簡がどのような内容であったのかは今となっては不明であるが、そこに記されていたことはバシレイオスをはじめ東方教会を震撼させ、迅速な対応を求めるものであったのであろう。

## 2.2 書簡 66

書簡 66 の冒頭でバシレイオスは先ず如何にアタナシオスが教会の問題と現状を痛切に嘆息し、このことが心痛の種となっているかについて述べる。その教会の現状を悲しむというよりも混乱し残念に思っていると言及し、過去における教会の衰退とその変遷について深慮し、以前のような静寂さと一致 (*τῆς ἀρχαίας εὐσταθείας καὶ ὁμονοίας*) を経験してきたアタナシオスにとっては本当に

心に痛みを抱え込む思いであることを察するという。

バシレイオスは自身の考えをここで述べる。カパドキア地方の諸教会において自身が成し得ることとは、西方の司教たちと同意すること (τὴν παρά τῶν δυτικῶν ἐπισκόπων σύμπνοιαν) だという。そのためにも共通した関心事が求められる。共通認識と意識が必要だというのである。そのためにはアタナシオスの協力が必要不可欠であるとバシレイオスは懇願するのである。バシレイオスはアタナシオスのことを「最も敬われる父よ (τιμιώτατε πάτερ)」と呼びながら西方からの支援と智慧を求め続ける<sup>5)</sup>。

そうした懇願の中、興味深い言葉が登場する。それが「諸教会のサムエルになってください (γενοῦ Σαμουὴλ ταῖς ἐκκλησίαις)」である。この前後には一切の説明がないため、ここではあくまでも推測になってしまうことは否めないが、これはバシレイオスの悲哀の声なのではないかと考える。旧約聖書のあのサムエルは最後の士師 (使徒言行録 13:20) として、また最初の預言者として (使徒言行録 3:24)、その時代の変遷の時に神によって用いられた存在であった。イスラエルの国づくりを担う、ある意味、民を一致させ統一させるために奔走した人物であった。バシレイオスはこのサムエルの姿にアタナシオスを重ね合わせて見ているのであろう。サムエルのように民を纏め、教会を一致させ導くことのできる人物はまさにアタナシオスを除いては他に存在し得ないと言わんとしているのであろう。

このような内容の事柄に関しての助言をアタナシオスに懇願するのは、本来ならば憚られることだと述べている。これはバシレイオスの心境を反映しているのであろう。彼の心理を少し垣間見ることが出来る機会かもしれない。彼は書簡でのこうした懇願が如何に脆弱なものであるかを自身は認識していると述べる<sup>6)</sup>。しかし、そうまでしても助けを必要としているのだという緊張感と切

---

5) Τίς οὖν ταῦτα διαπράξασθαι τῆς σῆς συνέσεως δυνατώτερος; τίς συνιδεῖν τὸ δέον ὀξύτερος; τίς ενεργῆσαι τὰ χρήσιμα πρακτικώτερος; τίς πρὸς τὴν καταπόνησιν τῶν ἀδελφῶν συμπαθέστερος; τίς τῆς σεμνοτάτης σου πολιᾶς πάσῃ τῇ δύσει αἰδεσιμώτερος; κατὰλίπε τι μνημόσυνον τῷ βίῳ τῆς σῆς ἐπάξιον πολιτείας, τιμιώτατε πάτερ.

迫感がこの書簡には漂うのである。

ここで最大の課題についての言及がなされる。それがアンテオケ教会の状態である<sup>7)</sup>。体の最も重要な部分を先ずは治療しなければならないことは、経験豊富な医師たち (τοὺς σοφωτάτους τῶν ἱατρῶν) が知っている。まさにそれと同じように、先ずは重要なアンテオケ教会の状況改善から着手しなければならないとバシレイオスは言う。なぜならば、アンテオケ教会こそが世界の諸教会において最も重要な教会であるからだと主張するのである<sup>8)</sup>。

アンテオケ教会では分断の危機が生じていた<sup>9)</sup>。この教会の衰退と分裂は全世界の教会の衰弱を意味するとバシレイオスは把握していたようである。この「体」を調和のとれた一つの体へと結び合わせること (εἰς ἑνὸς σώματος συναγαγεῖν ἀρμονίαν) が喫緊の課題であると彼は述べるのである。もちろん、それを可能としてくださるのは主ご自身であるが、主はご自身の御心に値する者たちを通してこの業を成し遂げられるという。

本書簡を閉じるにあたり、バシレイオスは述べる。主はアタナシオスを通してこれらのことを成し遂げてくださる。主が民衆の混乱を抑え、権威に対する派閥争いのなげな奪を食い止め、愛の内にお互いに従うことを可能とさせ、教会に素朴な力強さを復元させてくださることを祈願するという。

こうしてバシレイオスはアタナシオスの助けを懇願し、何とかして教会の一致を保持しようと試みるためにこの書簡を通じて訴えていくのである。

6) οἶδα ὅτι ἀσθενεῖς αἱ ἐπιστολαὶ πρὸς συμβουλήν τοῦ τοσοῦτου πράγματος.

7) 古代アンテオケの歴史については、Glanville Downey. *A History of Antioch in Syria: from Seleucus to the Arab Conquest* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1961) を参照。

8) τί δ' ἂν γένοιτο ταῖς κατὰ τὴν οἰκουμένην ἐκκλησίαις τῆς Ἀντιοχείας ἐπικαιριώτερον;

9) アンテオケ教会の問題については、Philip Rousseau. *Basil of Caesarea* (Berkeley, CA: University of California Press, 1994), pp. 288-99 を参照。バシレイオスとアンテオケ教会の問題の関わりについて詳述されている。

### 2.3 書簡 67

この書簡は比較的短い内容であるが、ここでも重要なことに触れられている。前回の書簡を通して訴えた通り、アンテオケ教会の全ての者が単一の調和と結合へと導かれることが求められているとバシレイオスは述べる。教会が分断されてしまっている現状の中、今必要とされるのが神に愛されている司教メレティオス (Meletius) の下で皆が一致することだとバシレイオスは述べる<sup>10)</sup>。「東方全体 (πάση τῇ ἀνατολῇ)」はメレティオスと共にあり (ἡμῖν τοῖς παντοίως αὐτῷ συνημμένοις ἐπιθυμητόν)、彼がアンテオケ教会を導くことを強く願望するという。それは小川が主流の川に流れ込み一つの大きな流れとなるように、この者のもとに残りの全てが統合されていくのが望ましいという考えが表されているのである。

このことが実現されるために不可欠なのが、アタナシオスの存在であるとバシレイオスはいふ。彼を通して、彼を中心として、そして彼の智慧によって、新たな適切な協定が齎されることが望ましいと述べる。こうした動向は既に西方では進められているということを、バシレイオスはシルヴァヌス (Silvanus) が運んできた書簡を通して既に理解しているという言葉をもって当書簡を閉じている。

ここでメレティオスについて言及されていることは注視されるべきことであろう<sup>11)</sup>。アンテオケ教会ではその司教座を巡る争いが勃発し、凄まじい権力闘争に巻き込まれていく。この歴史を探究することは大変興味深い。ここでは深掘りできないが、この人物を中心にアンテオケ教会を堅固なものにしようとした集団の中にバシレイオスも含まれていたと考えられるこの書簡の内容は、今後更なる検証と考察を要することであろう。

---

10) 注2を参照。

11) R. P. C. Hanson. *The Search for the Christian Doctrine of God: The Arian Controversy, 318-381* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 1988), pp. 382-4, 652-3.

## 2.4 書簡 69

本書簡において、バシレイオスは執事ドロテオス（Drotheus）を派遣し、後に彼を通してローマ司教へ書簡を送ることを検討していると述べる。アタナシオスにはドロテオスに同行できる適格な者たちを付添として派遣して欲しいことを伝え、ローマ司教に現状調査の依頼を行いたいと検討していることについて言及する。これはローマからの視察団がカパドキア地方を訪問する機会を設け、それを機に誤った理解に陥っている者たちを正して欲しいと意図するものであった。

その後、359年のアリミヌム会議（the Council of Ariminum）<sup>12)</sup> についての言及がなされる。この会議以来行われてきたことについてバシレイオスは完全に認識していると述べ、適切かつ効果的な言論の力を持ち、長旅の苦労にも耐えられ、優しさと機敏さによって、我々の間にいる倒錯した者たちを戒めることのできる人たちをローマからぜひ派遣して欲しいと依頼する。そしてこの動向が敵に悟られないように、海路によって赴いて欲しい、この地での事柄に対処するためにぜひ尽力いただきたい、と交渉を進めるのである。この辺りのバシレイオスの交渉術には目を見張るものがある。

ここで初めて「異端」と目される者たちの具体的な名が挙げられる。それはマルケロス（Marcellus）である<sup>13)</sup>。彼の主張は危険かつ有害、更に真の信仰には異質なものとバシレイオスはいう。

バシレイオスによると、マルケロスはアレイオスと正反対の不敬虔さを示していたという。マルケロスが主張したこととは、「唯一生み出された神格（*τοῦ Μονογενοῦς θεότητος*）」に対する不敬虔な主張であり、不適切なロゴス理解であると述べる。そしてそれらは糾弾されるべきであるが、未だに何ら非難すらされていないとバシレイオスは訴える。マルケロスの教説についてバシレイオス

12) アリミヌム会議については、Hanson, 371-80を参照。

13) アンキュラのマルケロスに関しては、Lewis Ayres, *Nicaea and Its Legacy: An Approach to Fourth-Century Trinitarian Theology* (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 76-7, 99-126. また、Hanson, 217-35, 269-77, etc. を参照。

は本書簡において簡潔に説明するのだが、彼の主張はこうである。「唯一生み出されたもの」がまさに「ロゴス」であって、それ故に、時満ちてこの地に姿を現したのであるが、元来た場所へとその後、帰還した。そして到来前に彼は存在せず、帰還後も存続することはないのだという。これがバシレイオスによるマルケロスの主張である。こうした教説が流布されている証拠をバシレイオスは自身の手元に保管しているとし、現時点でこの者たちの主張を否認するような物証は何も出てきていないともいう。

更に危惧されるのが、こうした者たちを教会的交わりに (*εις κοινωνίαν αὐτὸν ἐκκλησιαστικὴν*) 受け入れてしまっている状態であるという。これは大変懸念される状態であり、交わりの中に結合されるべきなのはアタナシオスとの結合であって、それによって正しい信仰から逸脱してしまっている者たちに正しい理解を示さなければならないという。そうすることで誰が味方であり、誰が敵であるのが判明するのだという<sup>14)</sup>。

次に、神によって指導的立場に置かれた者たちが、教会内における分裂状態を放置しておくことがないようにとバシレイオスは懇願する。あらゆる手段を用いて同じ教理を保持する者たちが一致へと (*εις ἑνωσιν συνελάσωσι*) 向かうようにとの説得を試みている。そして最後に何があっても正統的な信徒たちが派閥によって分断されないように、それぞれの指導者に従い反乱を起こすことがないようにと推奨する。平和の維持が第一である。その他のことは副次的なのだと言説するバシレイオスの言葉に誰もが奮い立たされるのである。

それぞれ表現は異なっているのかもしれないが、書簡からくみ取ることのできることは、如何にバシレイオスが世界規模の平和と一致を望んでいたか、また、そのために教会の一致が必要不可欠であったのかということである。教会

---

14) 但し、バシレイオスは単に敵味方を分けるための線引きのためにこの正統主義的理解を用いたのではなさそうである。ドゥルジニーナが指摘するように、バシレイオスの最終的な目標は、正しい信仰から逸脱してしまっている者たちも、いずれ正しい信仰理解へと立ち返ることであると、他の書簡の中で述べている点は注目されるべきであろう。Olga A. Druzhinina. *The Ecclesiology of St. Basil the Great: A Trinitarian Approach to the Life of the Church* (Eugene, OR: Pickwick Publications, 2016), pp. 121-46, 特に p. 128 を参照。

の一致によってこうした平和は齎されるのであると彼は確信を抱きつつ、信じてやまなかったのである。こうした思いとビジョンを我々は決して蔑ろにしてはならない。

## 2.5 書簡 80

この書簡 80 は大変短く簡潔である。この厳しい不幸な状況下で唯一与えられている慰めはアタナシオスからの保護 (τὴν σὴν προστασίαν) であるとバシレイオスという。このような状況において適切な最良の提案はアタナシオスからしか得られないというのである。そして祈りを止めずに、書簡を通して我々を鼓舞し続けて欲しいと嘆願する。ただし、対面の機会が与えられるならば、今までの自分たちの労苦が報われ、神の憐れみによって人生の中で忍耐してきた苦悩をも埋め合わせるものとなると述べる<sup>15)</sup>。

## 2.6 書簡 82

最後となるこの 6 通目の書簡も比較的簡潔な内容となっているが、その重要性は他に劣らない。ここではアタナシオスのことを「教会の医師 (ιατρὸν τῶν ἐν ταῖς ἐκκλησίαις)」と呼ぶことから始める。よって、絶望の深みから改善へと向かう希望へ立ち上がり向かうことが可能となるというのである。ただし、現状は依然として厳しい。教会全体が分裂させられた (λέλυται πᾶσα Ἐκκλησία) とバシレイオスは述べる。

ここでバシレイオスが好んで使うメタファーが登場する。それが航海する船の隠喩である。バシレイオスは教会を航海中の船によく譬える<sup>16)</sup>。波が押し寄せてくる。そこで船同士が激しく衝突する。外側からの原因で激しい波が押し寄せてくるものもあれば、内側にいる船員たちの困惑が原因となっている場

15) ὧν ἐθλίβημεν ἐν πάσῃ τῇ ζωῇ ἡμῶν, ἀντίρροπον πατὰ τῆς τοῦ Θεοῦ φιλανθρωπίας ἐσχηκέναι παραμυθίαν.

16) 書簡 81, 82, 90, 91, 161, 210, 243 など。更に『聖霊論』30.76ff.においても類似した表現がみられる。

合もあるという点は興味深い。そこで求められるのが適切な舵取りを担える人物である。これは大変な危険を伴う任務であるが、バシレイオスは問うのである。誰が主を立ち上がらせ、風と海を叱っていただくことができるのであろうかと。それは若い時から信仰の防衛に携わってきた人以外にはいない。つまり、アタナシオスしかいないのだという。

そこでここでも再度嘆願する。アタナシオスに書簡をもう一度送って欲しいと。そして採用すべき適切な行動の方針を指示して欲しいという。敵は懐疑的であるが故に、まずは司教たちが読むための書簡をお送りいただきたいというのである。その書簡をドロテオスに託してもらってもよいし、他の信頼できる方に託してもらってもよいという。その書簡はバシレイオス自身が責任をもって保管し、司教たちからの応答を得るまで責任をもって対処すると宣言している。そして創世記 43 章 9 節の言葉をバシレイオスは引用する<sup>17)</sup>。それはこの責任を生涯負う覚悟を示すためである。創世記のこの言葉は、息子ユダが父イスラエルに向けて誓った言葉であった。故に、バシレイオスはアタナシオスのことを「私の霊的父 (έμοι νῦν πρὸς σέ τὸν πνευματικὸν πατέρα)」と呼び、この聖句が語るように、責任を子である自らの身に覆い被せようとするのである。そして最後に、「平和を願いつつ、主を信じ同じ信仰に立つ者同士での相互一致の願い」(τῆς πρὸς ἀλλήλους ἡμῶν συναφείας τῶν ὁμοιοούντων) から、このような調停をバシレイオスは試みてきたのであると述べて、書簡を閉じている。

この書簡はある意味、バシレイオスの覚悟を読み取ることができるものであると言える。全責任を負ってでも自分が成すべきことを成し遂げたい、そのような強い感情が滲み出ている。そうまでして教会が直面してきた喫緊の課題の解決へと何とかして導きたいというその想いが、この書簡を読むすべての者に迫りくるのである。

---

17) 「あの子のことはわたしが保障します。その責任をわたしに負わせてください。もしも、あの子をお父さんのもとに連れ帰らず、無事な姿をお目にかけられないようなことにならば、わたしがあなたに対して生涯その罪を負い続けます」。

### 3. 学び得ること

以上、バシレイオスがアタナシオスに宛てて送った6通の書簡を概略的にみてきた。これらの書簡から我々は何を学び取ることができるのであろうか。いくつかの要素に纏めてみよう。

まず、バシレイオスが如何に「行動派」であったかが垣間見られることが指摘されよう。彼は問題解決のために行動した。じっと座っている印象は彼の生涯にはほとんど見られない。この点、アタナシオスという神学的巨匠に対しても臆することなく、勇気をもって大胆に懇願している様子からその姿勢と覚悟が窺える。後に彼は「バシレイアス」と呼ばれた町のような救貧施設の建設も行い、病者の世話に力を注いだ。カエサリアの司教として、教会への強い思いと顧慮を払いつつ、民の必要に応じた救貧活動をも成し遂げたバシレイオスの行動性には目を見張るものがある。彼には想像力があったのだと思われる。想像力を活用することによって、その洞察力を用いることによって、教会が直面していた問題を更に現実的に把握することが可能となったのであろう。それが彼を駆り立て、書簡を送り続けるという行為へと導いたのであろう。これは我々の現代社会においても多くの示唆を与えることであると考ええる。

次に、バシレイオスは「全体教会」の必要を常に意識していたということが言えよう。自分の足元だけを見ているのではなく、常に視野は世界へ、東方の状況だけではなく、西方の教会の状況に至るまで、その目は見据えており、常に視点を広く持つことを彼は意識していたように思われる。アンテオケ教会の問題に言及し、ニカイア信仰がアンテオケにおいても維持されるために必要な支持を彼が提供しようとした点は、彼の「教会」概念が如何に広大なものであるのかを如実に表しているといえる。一つの地域教会だけに関心を示すのではなく、彼は常にローマ帝国、特に東方の諸教会の健全な状態に対する関心を保持していたと言えよう。それ故に、アタナシオスに対しても「諸教会のサムエル」になって欲しいと嘆願していたのであると考ええる。

そして最後に、バシレイオスはニカイア信仰を重んじ、教会の一致をそのニ

カイア信仰に基づくものとして確立させようとした点が挙げられよう。彼にとって、教会の一致とは何にも増して堅持されるべき重要な要素であった<sup>18)</sup>。その一致とはニカイアの正統信仰の理解が基となるべきだと説いた。もっともアタナシオスに宛てて送られたこれらの書簡の時点では、まだ完全なる三位一体理解の表現にまでは至っていないことは認めなくてはならない。未だそこに向かう途上であることは確認されるべきであろう。その点、三位一体理解がバシレイオスの教会理解やその他の神学的思想の特徴となるのは、もしかすると、アタナシオスに宛てて送られた書簡の後のことになるのかもしれない<sup>19)</sup>。いずれにしても、基軸となるのがニカイア信仰であり、それを生涯を通して固守してきたアタナシオスが灯台の光のように闇の中で光り輝く存在となり、荒波に晒され嵐の中を彷徨う船のような教会にとっての道しるべとなることをバシレイオスは大いに期待していたのであろう。まさにこの正統信仰こそが真の信仰とそうでないものとの選別の規準となる。もっともドゥルジニーナが指摘

---

18) バシレイオスの神学思想における教会の一致の重要性について詳細に述べている先行研究は以下の通りである。Lukas Vischer, *Basilios der Große: Untersuchungen zu einem Kirchenvater des vierten Jahrhunderts* (Basel: Buchdruckerei Friedrich Reinhardt AG, 1953); Klaus Koschorke, *Spuren der Alten Liebe: Studien zum Kirchenbegriff des Basilios von Caesarea* (Freiburg, Schweiz: Universitätsverlag Freiburg Schweiz, 1991); Olga A. Druzhinina, *The Ecclesiology of St. Basil the Great: A Trinitarian Approach to the Life of the Church*, pp. 121-46. 特にドゥルジニーナは三位一体理解と教会の一致について詳述しており、裨益するところが大きい。

19) 実際、バシレイオスの思想の根底には三位一体理解があり、特にそれが彼の教会論において表わされているとするドゥルジニーナの研究においても、アタナシオスに宛てて送られたこれらの書簡にはほとんど触れていない。むしろこのアタナシオスへの書簡にそれなりの注目を施しているのはS. フォティネアスであろう。Fr. Silouan Fotineas, *The Letters of Bishop Basil of Caesarea: Instruments of Communion* (Australia: SCD Press, 2018), pp. 189-201 を参照。フォティネアスは「コイノニア」を鍵語としてバシレイオスの書簡の分析を行っている。アタナシオスに宛てられた書簡もこの「コイノニア」概念から考察すると、バシレイオスが目指していた教会の一致が真の交わりの中に組み入れられるという概念に基づいているものであることが明瞭となるという。この点は大変興味深い。今後更なる検証が求められるであろう。

しているように<sup>20)</sup>、バシレイオスにとって、この正統と非正統の選別とは、なにも敵味方の選別ではなく、正しい理解を示すことによって、その理解になかった者たちが正しい理解へと再思させられることを願ってのことなのである。そのことも我々は失念してはならない。あくまでも神のもとに立ち返ること、そしてその正しい理解と一致のもとで保たれる平和を教会に求めること、これがバシレイオスにとって重要な事柄であったということは明白である。アタナシオスの権威と威厳をもって正統神学の確立と浸透を願う故に、バシレイオスはこうした書簡を綴ったのだと考えられる。バシレイオスの印象的な言葉に、アタナシオスを「霊的父」と呼んだり、「諸教会のサムエル」になって欲しいと懇願したりする内容があった。バシレイオスが如何にアタナシオスのことを慕い、崇敬し、アタナシオスの霊的指導を切望していたのかをこれらの書簡から読み取ることができる。主によって選ばれし器がまさにアタナシオスなのだとして述べている点は、バシレイオス自身の信仰的態度を表している。多くの逸脱してしまっている者たちにも、その逸脱からの立ち返りというものを促し、その民を、教会を、一つに纏めるために、尽力して欲しいとアタナシオスに迫ったのである。実際、アタナシオスがどのように応答したのかは明確ではないが、4世紀後半のこの時代において、教会の喫緊の課題をどのように解決しようとしたのかを垣間見ることは大変興味深い。

また、ニカイア信仰における教会の一致としての枠組みとして、アンテオケ教会の問題とその存在意義の大きさも考えさせられる。まさに嵐の中を突き進む船のメタファーである教会というキリストの体の重要な部分が、このアンテオケ教会であったわけである。アンテオケ教会とは直接関係のないバシレイオスが、あえてこのアンテオケ教会の問題に言及しているのには相当の理由があったはずである。コリントの信徒への手紙一の一の言葉にあるように、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむ。まさに「キリストの体」としての深い認識と理解があったからこそその行動であり懇願であろう。アンテオケ教

---

20) 注14を参照。

会の問題がどの方向に向かうのかによっては、バシレイオスをはじめとする東方教会の全域においても大きな影響を受けることは不可避であったことを、彼は深く認識していたのであろう。この教会の分裂の問題に、倒壊しそうな教会に、バシレイオスは早い段階から釘を打ち込むことを願っていたものと思われる。アタナシオスとメレティオスの関係は、実際、良好なものにはならなかったようであるし、お互い対面することはなかったようであるが<sup>21)</sup>、それでもバシレイオスは両者が対立するのではなく、一致できるようにと奔走したのであった。ここにもバシレイオスの意図する教会の一致の保持といった思いが強く感じられるのではないかと思う。

#### 4. おわりに

バシレイオスがアタナシオスに宛てた6通の書簡は、バシレイオスがなぜアタナシオスに宛てて書簡を送ったのか、その根底に何があったのかを我々に示唆する。そして教会の一致の保持のために奔走していたバシレイオスの姿をみることができる。アタナシオスが神学的権威と教会的機軸となり、彼の支援を受けることによって、更にアンテオケ教会という主要教会がニカイアの正統神学のもとに一致を堅持することによって、カパドキア地方の教会にも一致が齎されるとバシレイオスは確信していたのであろう。教会の一致こそがバシレイオスの目指していたところである。それが彼の神学的思想の特徴であり、彼の思考の通奏低音として常に彼の内に存在していたのである。

バシレイオスのこのような姿勢と神学的思考は、今日の我々にとっても示唆するところが多い。また、教会の一致という重要な概念はいつ如何なるところでも喫緊の課題として我々に突き付けられている。その意味でも、現代の我々にとって、バシレイオスのように行動し、教会の一致が可能であるとの確信と共に、「平和を願いつつ、主を信じ同じ信仰に立つ者同士での相互一致の願い」を祈りつつ歩むことが求められているのだと考える。まさにこのことが、

---

21) Hanson, 652. ハンソンも指摘するように、歴史家たちは、アタナシオスとメレティオスが和解できなかった理由について未だ判明できていない。

キリストの体であり，その部分である我々一人ひとりに，我々教会に，時空を超えて与えられているミッションであることを深く覚えさせられるのである。

(いいだ・あおぐ)